

花癡物語

全章

精進場 健史・作

巻の章 幽溪のもとにて邪淫の情を交わしたる事

遅咲きの山桜が漸く散りそめ、何万もの桃色の吹雪模様が、谷あいや蛇行する清流の水面を彩った。厳しかった冬の記憶は既になく、東国の辺境の地にも、そぞろに季節への期待が頭を擡げている。春霞はうす紫に山肌の樹木を染め抜き、その風情はまことに幽玄というべきであった。

いま読者を案内せんとする、時は嘉吉の半ば、即ち応仁のいくさの前夜である。しかしながらこの物語は、世の波乱をめぐる壮大な叙事詩でもなければ、人々に処世を説く実利有益の訓話でもない。むしろ、季節の花々が自在に咲き散るが如くに、何ら野心もなく生きていた登場人物たちの、きわめて個人的な出来事であると思っていたきたい。

さて、武蔵国の郷の地侍、太田共秀の妻、時子は、屋敷の庭先に立ち、岩にぶつかりながら水音をたてる川面に、幾千幾万と散りばめられる花弁のさまを、恍然として眺めやりつつ、やや品をつくるふうと言った。

「今年の山桜は、またずいぶんと見事な散りぐあいだこと。本当に、この谷は梅雨さきの雲がたなびく墨画のような趣も妙ではありますが、何といても山野の花々に飾られた、今様の風雅には劣ると申せましょう。どうか、あなたもこちらにいらして、いっしょにご覧遊ばしたらいかがですか？」

庭に面した書院の間では、檜の材で誂えられた大きな文机を前に座した共秀が、洗い面容で画筆を執っていた。机上の画紙には、墨の濃淡のとり方にいささかの甘さが残ると言わざるを得ないような、山水画の習作が未だ完成能わずの態で置かれてある。

「今日はどうも興に乗らぬ」

共秀は白茶けた、力のない声で言うと、それまでの端座の姿勢を崩し、がくりと肩の力を抜いて大きく息をついた。

「ならばなおのこと」と、時子は艶のある声を模して続けた。「花々をご覧になるとよいですわ。いっそう筆に趣がそなわることでしょうに。……あら、あの山吹の見事さといったら、どうでしょう」

なるほど、時子の視線の行く方、山の傾斜地に広がる畑の縁などに、鮮やかな黄色い花々が乱れ咲き、まだ心なしか冷たさの残る風に、その長い茎を揺らめかせているさまを眺め

ることが出来る。山吹だけではない。にわとこ、雪柳、桃、沈丁、馬酔木などが、目をやるそこかしこ、競って色を奪い合い分かち合い、明るい光彩を放つ樹木の新芽と混ざり合いながら、迫り来る山肌を原色の斑紋様で飾っている。そのさまは、さながら天然万象の織りなす森羅の曼陀羅図絵の如くであった。

共秀はまるで気乗りのしない、妻の言葉に義理立てするともいって様子で座を立つと、書院の障子戸の傍らに、時子からは数歩も隔たつて立ち尽くした。ことさらに身を離れた夫に対し、時子はうらめしい気持ちも抱かないではなかったが、却つてそのような故意が明白に伝わってくる身のこなししか出来ぬ共秀の不器用さに、何がしかの優越を覚えたというほうが真実に近い。

「うづむ」と、共秀は春霞に幽む深山溪谷のさまをぼんやり見ながら、唸るような声を出した。そしてひとこと、「駄目だ」と呟いた。

何が駄目なのか、読者諸氏には皆目見当もつかないに違いないが、時子には歴然としていた。共秀は自然の雄の前にして、己の画作の拙さを嘆いているのだ。一事が万事、時子には単純な夫の心の動きが、手に取るように判るのであった。

眼前に広がる季節の雅致に誘われた様子で、薄い紫色の小袖の裳裾を引きずりながら、時子は縁を降り、屋敷の庭先へと歩みを進めた。その品のつくりかたは、またそれとなく共秀をめぐり、春の色香を花々と競おうとでもするかのような印象を与えるのであったが、むろん時子のはっきりとそのよ

うなことを意識していたか否かは判じ難い。

さて、この庭の片隅には、京の都で昨今流行りはじめたという禅僧好みの枯山水が、申しわけ程度の広さで造られていた。これも、田舎者であるだけになおのこと新しいもの好きであった、共秀のご愛嬌といふべきであろう。しかも、そこだけ急場凌ぎのようにして詭えられた白い築地塀に、石庭が思いのほかよく映える結果となっていたから、見栄っ張りの強い共秀は大いに満足し、先の年に関東管領、上杉某の使者が巡察に来たときなど、終始庭に面した書院に通し、枯山水に対する称賛の言葉を聞かぬうちは帰すに帰せぬといったあんばいだったのである。

この自慢の石庭の傍らまで来たとき、時子は自分の立つ場所よりもやや下方の、谷川の流れに向かって枝を延ばす幾本もの山桜のそのひとつの下に、まるで散り急ぐ花弁とともに舞をあそび踊っているかのように動く人影を認め、「あら、あれは」と一驚を喫するが如き声をあげた。「萱女ですわ」

共秀は最初、妻の頓狂な叫びの理由が、対岸の山の樹木のどこかしらで、折しも啼いた鶯の声音によるものだとかをくくり、無関心を装っていた。しかし、それに続く萱女という名に卒然と心を動かされたのか、まず妻の顔を見、次いでやや眼下に広がる山桜の並木のほうへと目をやった。

「木の芽どきゆえ、無理からぬことよ」

共秀は、瞳にあわれの色を浮かべながらも、ことのほか無感動を装おう口ぶりで呟いた。

山桜の下で散る花弁とともに遊ぶのは、この郷にあつては

知らぬ者としていない狂女、萱女であった。年の頃は既に四十の坂にかかるとも思われるが、誰も齢を数えている者はいない。萱女というその呼び名すら、誰が付けたとも知れぬうちに近隣の者が呼びならわすようになったのである。ある者が言つには、辺りの野山に萱が生い茂る季節に生まれたからだといふが、それすら定かではない。萱女は話をすることも容易ではなく、姫飯を食べるときすら手づかみというありさまだった。ただ心のつくりが他の人間と少し違ふということを除いては、花々や虫けらや蝶どもと戯れることを好むだけの、きわめておとなしい女であるに過ぎなかつた。歳のわりには肌がむつちりと白く、ぼんやりとした赤い唇のあたりには、妙な艶めかしさすら漂っている。

その萱女は、じつはこれまでに四たび、父親の知れぬ子を身籠もつたことがあつた。一度目は十八歳のときに女の子を産んだが、この子は生まれてまもなく悪病に罹つて死んだ。二度目は二十歳のときに産んだ男の子である。この子は五つになるまで萱女の父母によつて育てられ、聡明な、しかも、まるで貴公子の幼少を思わせる美しい男児に成長していったが、五歳になつた年の秋、ちょうどこの土地を通りかかつた、京の都へ向かうという旅の僧侶が、貧しく年老いた祖母のもとで十分な養育を受けられないでいる幼な児の境遇をあわれみ、その身を預かつていったのだった。その後、萱女は二回、子を妊んだものの、二回とも月半ばにして流れている。最後に身重となつたのは、つい三年ばかり前のことであつた。

ところで、これらの子の父親が誰であるかということについては、噂する郷の村人どもの口差のなさにあつても、いづこにはつきりしなかつた。幾人かの人は、かなりの自信をもつてある人物の名をこつそりと囁くこともあつたが、事が事のゆえにか、あるいは他の子細によつてか、大仰に語ることを自ら戒めるふうだつたのである。

くすんだ赤い着物を身に纏いつつ、淡く匂い立つ花霞のなかを、踊るが如くに手を伸ばし身をくねらせながら、狂女はやがて二人の眼界から消え去つていった。

共秀の気持ちはいよいよふさぎ、表情は憂鬱の度を増した。たつた今しがた、己の画の技量の拙さを思い知らされたうえに、今度は、出来るなら考えたくない萱女のことにも思案を奪われたからである。何となれば、萱女が誰とも知れぬ男の種を四たびも宿したという事実は、自らが営みを任された郷村の風紀良俗の紊乱ぶりを示すことに他ならず、それゆえ共秀の手腕の無能ぶりを、守護、地頭は勿論のこと、ひいては関東管領にまで印象つけてしまふような顛末にもなりかねない恐れを含んでいたからであつた。

「気晴らした。どれ、ひとつ辺りを漫ろに歩くだけでもするか」
やがて気のふさが頂上に達したかと思われる頃、今度はどことなく落ち着かぬ様子すら見せて、共秀はひとりこちた。

時子は夫の言葉に俊敏に応じた。

「それでは、私も一緒にさせていただきます」

口付きは丁寧であつたが、語気には溜めていたものを吐き出したような、頑とした鋭さがこもっている。お一人で行かせるわけにはまいりません、と、時子の眼は訴えていた。

「いや、私ひとりでもいろう。一人になりたいのじや」

共秀の空とぼけたような返事。それは案じたとおりの夫の返事であつた。時子は長く束ねた黒髪を大きく振りながら夫のほうへ向き直ると、さらに言葉に力をこめて言った。

「ようございます。この春の雅趣、おひとりで心ゆくまで堪能されるのも一興と存じましょう。ならば、よもや村境の納屋へ参るが如き、無粋なまねもありませんまい」

共秀の顔が一瞬、蒼く硬張つた。時子もその変化を見逃さなかつた。

「納屋とは何のことじや。まったく野暮なことを言うやつよ」

共秀は大声で笑い飛ばしたつもりだつたが、その表づらとは裏腹な内心の動揺が、ことさら妻から逸らそうとする目線のすわりの悪さに瞭然である。時子は、己の報いた一矢の効き目に取り敢えずは満足して、主人が飼犬をいつとき解き放つが如く、夫が他所へ出掛けるにまかせることとした。時子の策にまんまとかかつた共秀は、背中に汗をかきながら、這々の体で屋敷を抜け出した。

納屋とは、村境の谷の日陰に山を背負つて建つ、いまはもう使われなくなつた茅屋で、かつては馬の飼葉をため置いた家のことである。この納屋が、共秀と住み込み女中ちさとの密会の場所なのであつた。

共秀は郷の地侍という身分でありながら、土地の経営のこわりなどについてはとんと疎い。むしろ風流人を気取りたりで、宋画の流行を聞けば自らも画筆を執り、枯山水が評判と耳にすれば急ぎ詠えるといった軽薄な趣味人よりは、既に読者諸氏もご存じのところである。世情は混乱の相を増し、彼の地で専断の度を越した將軍義教が暗殺されれば、此の地では下総にて関東管領に対する謀叛が画策される、やれ士一揆、やれ京の都では將軍家の家督争いと、末世の呈さながらであつたが、共秀はそのようなことにはいっこう気をかかず、ただ風雅を追うばかりであつた。さらに、水墨画だ枯山水だと禅僧趣味をひけらかす共秀は、そのわりには生臭く、元来が好色のたちなのである。妻帯の身でありながら、近頃は若い女中のひとり、ちさの色香に迷い、逢瀬をかさねていたのだ。

むろん、そのことは勘の鋭敏な時子にはすぐ知れるところとなつて、つい今しがたの納屋の件となつた次第。根が小心者の共秀は、画筆が運ばぬ、萱女が踊るといつた、自らにとつての不都合は常々思ひださぬよう、気がふさぐとちさのものとへ通うのだった。

さて、背中に冷や汗を流しながら屋敷を抜け出した共秀は、幽谷の底に刻まれた径を村境へと辿つた。折よく空は蒼く澄みわたり、谷合いを行く川の流れもすずしく、まるで数千万の白糸をあつめて深山の新緑を映すが如き面白み、ときに白く岩に砕け、深みに暗く澗をつくりながら早瀬を下る。どうかすると川面から鰻が跳ね上がり、その黒々とした形姿

をたまゆら道行く人の眼にふれさせた。散り際の山桜の下を延びる径の端には、御行の黄色い花が点々と輝き、わたる風に淡い香をとけこませる。むろん、共秀は、そのような野趣に気をまわす心の余裕など、とうに失っていたのではあるが。

ちさとの密通がなぜ妻の知るところとなったのか、共秀にはとんと見当がつかなかった。だが、共秀の女色好きはなにも今にはじまったことではない。とすれば、賢明にして人情の機微に通じられた読者諸氏にあつては、決してそれが不思議でも何でもないことにお気づきいただけることだろう。幾度も煮え湯を吞まされてきた時子にしてみれば、夫のほんの些細な身のこなし、口ぶりの変化にも、敏感に覚るものがあるのである。加えて、共秀は単純で愚直なたちであつたから、隠すということが得手ではない。狭い屋敷のなかに少ない下男下女。人の目もはばかりこの出来ぬところにあつて、ことさらちさに目をかける共秀の言動ともなれば、周囲が何かを詮索するのも尤もなことなのである。却つて気づかぬは共秀のほうであつた。

谷に沿う径をほどなく辿ると、対の岸へと渡す小橋。危なげな足取りで流れの上を歩き着けば、そこは山の陰になる。草芍薬が林下にそつと息をつき、湿った山肌の岩の上は一面びっしりと萌える雪之下。

漸く納屋に至り着いた共秀は、ほつと胸をなでおろした。ちさには“いつもの場所へ行く”と耳打ちしておいたが、勿論すぐに後を追えるものではない。しばし待つ覚悟は常にし

ている。が、今日に限って、まさか妻が先を越して来るなどか？。“納屋へ参るが如き無粋なまねもありますまい”……そう語る時子の不敵な面持ちと気丈な声とが頭のなかによみがえり、共秀の胸は千々に乱れ騒いだ。

やがて、半時ちかくもたつた頃であろうか、納屋の立て付けの悪い扉の鳴る音がして、「旦那さま」と呼ぶ女の声が出た。ちさである。

「おお、来たか」

共秀は声を殺しながらも待ちかねたように言い、自らのいる薄暗い納戸のような部屋のなかにちさを招き入れた。ちさは着流しのまま、急ぎ小走りにやつてきたとみえて、顔はほんのりと赤く染まり、小鼻が息とともに小さく動いている。

そのさまや、微かに漂うちさの汗の香に、共秀は俄に情欲を刺激されて、淫らに半開きになったちさの薄い桃色の唇に、己の厚ぼったい唇を押しつけ、手は襟元からちさの豊満な胸をまさぐつた。若い女の濃艶な体の匂いが、共秀の官能にさらに火をつけ、傍らの藁の上に相手を押し倒そうとする。

「お待ちくださいませ、旦那さま。いませ」

熱い吐息とともに、しかしちさはそう言つて共秀を制した。

「どうした、ちさ」

共秀は急ぐ気を抑えるように、相手の体に手を掛けたままで問いかけた。

「奥方さまが……」

ちさは言いにくそうに口を歪める。

「なに？、あれがどつした？」

共秀は、思わず氣勢をそがれて相手を見つめた。つい今しがたの胸の騒ぎがふたたび。

「私がお屋敷をしますさいに、奥方さまがもの凄いい形相で私のことを睨め付けてございました。まさか、奥方さまにあつては私どものこともかねてご存知なのではと。そればかりが気になっております」

語りながらも、ちさの眼はふしだらに潤んだ。共秀はちさの体から手を離し、

「それで、あれは何か申したか」

「いいえ、何も」

共秀は苦々しく舌打ちして嘆息を漏らす。

「いったい、あれはこの納屋の牛の如き女じゃ」

ちさは怪訝な顔をして、ひとこと「牛？」と問い返す。

「そうよ。知らぬふりを決め込んでおきながら、突然、尾で尻にたかる虫をはつしと叩きつぶす牛。まったく、油断も何もあつたものではない……」

ややあつて、共秀は更に渋い顔容となつた。うかつにも、自分を妻の尻にたかるつまらない虫であると例えてしまったことに気づいたからだ。

「それではやはり、奥方さまは私どものことを……」

ちさは深刻に声をふるわせ、言いかけた。

「なに、案ずるには及ばぬ。男の甲斐性というもの、あれ

にしても知らぬわけではない」

そう言いながら、共秀は己の心癖に流されて、ふたたびち

さの体に手を掛けた。不都合なことは、女色に戯れて忘れようという心癖である。

ちさの襟を力まかせにはだけると、露わになつた乳房。共秀は溺れるままにそこへ吸い寄せられた。手はちさの腰をまさぐり、脚に沿って動いた。ちさの肌はどちらかという浅黒いほうであつたが、触れる手に餅のように吸い着く風合いは、まるでその身までもが溶けてひとつになるが如き心地とともに、共秀をいともたやすく忘我へと誘つた。……

「旦那さま」

やがて、ちさは共秀に呼びかけた。

「何だ」

急ぎ身づくろいをする共秀は、ちさを見おろす恰好になつた。

「奥方さまが私どもの仲に通じていらつしやるからには、かような忍びごともままならぬものとちさは覚悟いたしております」

ちさは、小声ながらも決然たる声色。

「何を言うのじゃ。案ずるには及ばぬことと申したはず」

共秀はちさの肩に手を掛け、そう言つた。

「いずれお暇を言い渡されても致仕方ないこの身ゆえ、お願いでございます、それまでは、どうか奥方さまとは決してこのような……」ちさは言いよどんだ。「……どうか、このちさだけを……」

ちさの言わんとするところを悟つた共秀は、愛しさの余りふたたびちさを抱き寄せた。共秀は、若さの盛りにあるちさ

の体に身も心も奪われているのだった。ちさを失うことなど、とつてい考え得ることではない。

「心配するな。暇など出させぬ」

しかし、時子との事について、共秀ははっきりと言明することをしなかつた。

実際、ちさと契りを交わしながら、共秀はいっぱうで時子との房事を欠いたこともないのだった。ちさのみずみずしい体に比べれば、四十の坂を越えようという時子の容色の衰えは争えなかつたが、時子はちさよりもはるかに、共秀という男の性を知りぬいている。共秀にしてみれば、そんな時子の手練手管から自由にはなれぬ。畢竟、閨室に入れば共秀は時子の手中の駒も同然なのであった。

その事情をよく察していた時子であつたから、ちさに対して向けたものも、単なる嫉妬などというけちな感情ではない。女としての面目と言おうか気位と言つべきか、年端のゆかぬ小娘に出すぎたまねは許さぬと、自尊と意地が鎌首をもたげ、夜叉の如き鬭争心。もとより共秀に対しては、当初から勝つたも同然の女丈夫ではある。

三の章 邪流の僧の授けし法が奇病を起したる事

さて、時子はその夜叉の面をひとまず心の鞘に隠すふりをしつつ、ちさに報いる機会をうかがつた。女の敵は女とはよく言つたもの。生半可な方法では小娘の出姿張りを思い知らすに至らぬとは、女の性の怖さと言つべきであるうか。あ

あでもなくこうでもなくと、めぐる思案の果てになお心定まらぬ時子は、ついに村境の荒れ寺に住まう正体不明の乞食坊主、通称着蓮なる男のもとを訪ねることにした。着蓮は、薬草、毒草の類にことのほか知識が深かつたのである。

山桜の枝が、むせかえるような新緑をしたたらせ、道端に乱れ立つ幾百本もの藪風の茎の先に、飛び散りまた集つ小虫に見紛う白い小花が揺れる、とある日の昼日中、時子は意を決して屋敷を後にした。

村境の荒れ寺は名を華瓶庵といい、もとは弘法大師の高弟が開いたと言われるほどの名刹であつたが、いつの頃からかさびれ始め、今はちつぽけな本堂ひとつが残る侘寺となつてゐる。太田の屋敷から一里ばかりの川下へ、共秀の妻がひとり辿る姿に、行きあう百姓たちは一様に事を訝しがる目でもつて振り返るが、意に介するような時子ではない。道半ばも行った頃、手に大きな躑躅の一枝を持った萱女とすれ違つた。虚ろな眼つきを虚空に漂わせる萱女は、いま自分が来た方向へと急ぎ足で消えてゆく時子の姿を、いつまでもぼんやりと見送つていたが、むろん時子は気づかない。そのうち何を思ったのか、萱女は手にした躑躅の枝から朱色に輝くその花弁をむしり取つて口に頬張り、噛みしだいたのである。あとは谷川のせせらぎ、そして鳥のさえずり。

華瓶庵は谷川の北側の山肌の中ほど、なだらかな傾斜地にこんもり山躑躅が咲き乱れる、躑躅丘と呼ばれる場所にあつた。痛々しいばかりに鮮やかな躑躅の乱舞に、これでもかとも瞳を突き刺され突き刺され、狭隘な登り道を行くと、やがて

その狭間から、土壁も剥がれかけ、屋根の宝珠も欠け落ちた、無残な姿をさらす御堂が姿を見せる。一見したかぎりでは無人の野寺である。

「和上さま。ごめんくださいまし、和上さま……」

閉ざされた扉の前に立ち、時子はそう呼びかけた。ややあつて、がたがたと大きな音をたてて扉が半間ほど開けられ、中から無精髭を生やし、前歯の欠けた、濁った眼をぎよろつかせる、頭髪の逆立った老人がぬつと現れた。着蓮である。紫の衣を身につけてはいるが、色もくすんでそのみすばらしさは全くの乞食坊主というほかはない。

「やや、これはまた珍客じゃ。太田どのの奥方がまいるとは……」

着蓮は時子の頭から脚のさきまで、体じゅうをなめ尽くすような、ねっとりとした目線を投げながら言った。おまけに吐く息がひどく臭い。

「是非、おたすけいたいただきたいことがございます」

時子はそれだけを言うと、不気味な相手の風貌を避けるかのように顔を背けた。

「ここでは何じゃからの、さ、御堂のなかへ」
欠けた歯の隙間から、赤くぬめぬめと動く舌の気色の悪さ。

薄暗い本堂のなかは、木材の饅えた、湿っぽい匂いが漂った。埃をかぶった護摩壇の前に、色彩の剥げ落ちた一面二臂の不動明王が結跏趺坐しているが、経本のたぐいはなどは眼につかない。

時子は本堂の暗がりのなかで、今しがた瞳を刺し貫いたばかりの、鮮やかな躑躅の幻像にしばし心を奪われていた。

「さて、話とは何かな」

着蓮が臭い息を吐きながら訊いた。

その声によって幻視から引き離された時子は、女としての恥を忍んで、事のあらかたいつさいを打ち明けたのである。

「このままではわが身が救われませぬ。ちさなる女畜生の自堕落、醜猿を誅すべき法を、どうかお授けくださいまし」

時子の話を、まるで淫書危な絵のたぐいを眺めるかのような、不埒な笑みを浮かべて聞きいつていた着蓮は、ひとこと「心得たぞよ」と呟き、しばし思案の態となった。

ところでこの着蓮なる男、さきほどは正体不明と書いたのだが、それはこの物語の登場人物たちにとつてのこと。読者諸氏のためには、のちのちのためにも前置いたほうがよろしいと思われるので、素性を明かしておこう。実はこの乞食坊主は、かつては京の東寺にあつて真言の教えを奉じる密教僧であつた。東寺といえは、嵯峨天皇が弘法大師に勅賜した、正式名称を金光明四天王教王護国寺なる名刹中の名刹である。そこに籍を置くとなれば、修行僧としてもひとかどであつたはずなのだが、何の因果からか、当時一世を風靡した、こともあろうに髑髏を本尊と立てて男女陰陽入り乱れての交会こそ悟りへの道理と教える淫祠邪流になびき、その咎を以て都から放擲され、この東国の山村に至り、捨ておかれていた華瓶庵に住み着いたのが二十年あまりも前のこと。いらしい噂に聞こえる毒草についての博識は、この髑髏本尊の邪流の

修法のためゆえに得たものなのであった。というのも、この流は草本から煮出した怪しき毒の力に頼って、現人を離れ三昧に入り、本尊加持の霊力を得ることができると説いていたからである。

やがて、普蓮はにやにやといやらしい笑いを浮かべると、時子のもとへぬつと身をすり寄せ、顔を近づけて言った。

「折しもいまは月が危宿にある時、絶好の機会といふべきじゃな。よろしいか、山荷葉、青花、草芍薬、十葉、雪之下、無葉蘭、矢車草。この七種の草の花をもにすり潰し、斑蜘蛛を百匹、山蜂の子を百匹、加えて毒蛇の毒を百匹分、ともによく煎じて煮汁を取るのだ。そこへ月水を混ぜ、さらに炉にかけ、月水の色が変わりかけたところで……」と、普蓮は勿体ぶつて袂から汚らしい巾着を取り出し、なかから黒っぽい木の実ほどの大きさの丸薬を手にとり、「この秘密の仙薬を落とし、炉にかけたまま密咒を百回となえればよい」

ここで読者に説明しておく。危宿とは、月の軌道上に該当するある一つの星座を神格化したもので、古来、毒と薬の力を司る神であるとされている。そのときに月のある星座の神が、自然や人間に対してもっとも強い影響力を発揮するのだ。

普蓮の言葉を聞き、時子は驚き入って問い返した。

「月水？」

「いかにも。女子の月のものは、前生の功德ゆえ人間界に生まれし魂がはじめに宿る褥。金剛不壊の菩提心の源といふべきじゃ。その力は摩訶不思議なるも、かえりみる者は少ない。奥方さまのもので、むろん障りはござらぬて。へへ……」

……

普蓮は赤い舌を出して笑いながら、さらにつけ加える。

「この薬汁をば、相手の女の女陰に塗るのじゃ。いずれ体じゅうの膚という膚に瘡痕が遍はり、膿汁にまみれ、やがて爛れ腐るばかりの最期になるつて。……」

「女陰とは……」

「さよう。つけ加えて申せば、その膿汁にもまた同様の験があるものゆえ、心しておくことじゃ。但し、男には口より服させることで効験をみる」……

普蓮のもとから戻った時子は、共秀には内密に、厩番の十郎なる下男を呼び出し、七種の草の花、斑蜘蛛百匹、山蜂の子百匹、そして毒蛇百匹分の毒を取りに行かせた。実はこの十郎、ひそかにちさに対して懸想していたのだが、つまりは己の知らぬままに思いを掛けた女に毒を盛る手伝いをさせられたわけである。問題は、いかにしてちさに毒汁を施すか、であったが、時子は奸計をめぐらせ、この十郎を利用した。

ちさとの逢瀬を取り持つと、言葉巧みに言い包めたうえ、普蓮より授けられた毒汁を、媚薬と偽って持たせたのだ。すなわち、いかに頑に男を拒む女であっても、ひとたびこの媚薬を秘所に塗せられれば、たちまちのうちに体は火照り、肉の芯はうずき、必ず男を迎え入れなくなるのだと吹聴した次第。むろん、ちさにすれば十郎と契るなどもつてのほかであるから、容易に体を開くことなどあり得ないのだが、時子の目的は、ただちさに毒汁を施すことのみであったから、何の差し障りもなかった。

果して、十郎はちさに言い寄ったもののたやすく刎ねつけられ、されば件の媚薬なるものに頼るばかりと、こればかりは腕づくで泣きわめくちさを取り押さえ、時子に言われたとおり秘所に薬汁を塗したが、当然ちさの体は火照らず、うずかず、却ってちさの叫びを耳にした共秀に踏み込まれてしまったのである。逆上した共秀は刀を振りかざし、まさに十郎の頸めがけて振り下ろされんばかりのとき、さすがに見かねた時子が割って入って、素知らぬふうを装って仲裁した。おかげで十郎は命拾いし、暇を出されることで落着いたのであるが、十郎にすればとんだ災難といつべきであろう。

さて、日が過ぎ、やがてしとどに雨の打ち続く季節となった。あまねくが天水白糸にしつとり濡れそぼち、山や谷のそこかしこ、手毬のごとき紫陽花、山紫陽花。むらさき、薄紅と咲き競い、葉は露を集めて輝くさまを見る頃、ちさの顔に小さな変化が生じた。頬のちようど真ん中に、花の蕾に似た瘡痕がひとつ、ぼつりと吹き出したのである。するとまたぼつり鼻脇に、額にぼつりと、同じ赤い蕾がいくつも結びはじめた。年若い女のことであるから、ちさもたいそうう病んで、次第に共秀に己が顔を見せることも心苦しく思われだし、谷間の納屋の密会にあつても鬱々として愉しまなくなつた。

そんなある夕のこと、厨の仕事をしていたちさは、共秀愛蔵の皿を割ってしまうという不祥事をしでかした。対の鳳凰の画柄が入った大器で、真偽のほどはともかくも、唐は景德鎮の産物と共秀が固く信じていた品物である。

陶の割れる音とちさの小さな悲鳴を聞きつけた時子がまず厨に姿をみせ、割れた皿と取り乱すちさの姿を認めると、冷然と、しかも大仰な口ぶりで言った。

「家宝の皿を無にするとは、なんということをしてくれました。不用心、忠ならざるにあつては腰元たる任には及びませぬぞ。共秀どのよりは相応のお取り沙汰のある次第、重々心しておきなさいまし」

目はあたかも獲物を追い詰めた山狼のごとき不敵さ。ちさはその場に泣き崩れ、時子は厨を出ていった。やがて騒ぎを聞きつけた共秀が姿を現した。

「この粗相、ただごとによるとは思いがたい。わけを話してみるのがよからう」

愛蔵の品を壊したことは本来許せぬことながら、相手が身も心も奪われたちさとあつては、いきおい共秀の呵責も勢を削がれる形である。

「もうしわけございません。じつは、この腕が、腕に……泣き顔もあらわに、ちさは訴えるように声を絞りこんだ。

「腕が、どうした」

「瘡痕が、腕にも出はじめたのでございます」

共秀が見ると、ちさの両の腕にもぼつぼつと、赤いできものが吹き出していた。皿を持つとうとしてそれを見出し、驚愕のあまり取り落としたというのであった。

「……気に病むな。ちさ。こんな瘡痕がどうした。お天道さまも、おまえの容色の麗しさが妬ましいのだ……」

そうは言ったが、ちさの膚の病はいっこうに良くなる気配

をみせなかつた。深赤色の瘡痕は顔から胸、腹、脚にまで無数に散らばりはじめ、やがて、あたかも蕾が花を開くがごとく、次々にぱくりと口をあけた。肉がささくれ立ち、まるで無数の花弁のように広がった。瘡痕の傷口は、激しく疼き、ときにしとしと雨の降り続く日にあつては、さながら手足を焼き切られるかのような苦しみ。医者に見せても手の施しようがなく、全身に咲いた不気味な花の如き瘡痕の傷口からは、ついに極彩色の膿がどろどろと流れはじめたのである。膿は強い臭気を放つて、湿気とともに満ち、ちさの容姿はもとの美しい面影をまったく失うほどに見苦しく変貌しつつあるのだった。

共秀は、ちさの病が進むにつれて、その体に対する興味を次第に喪失していった。

参の章 妙なる笛の音が神通変化を生ぜしめたる事

ところでその頃、谷を下る流れを逆に辿りながら、二重三重にかかる山々の稜線を仰ぎつつ、在を目指して道をゆく若者があつた。一人の稚児を従え、みずばらしい素襖に脚絆という旅装束。懐には一本の横笛を携えている。歳はまだかなり若いとみえ、女人さえ羨望するようなみどりの黒髪を長く背に束ね、そのすすしき目もとの印象的な顔だちには貴公子然とした洗練が漂い、高く通つた鼻梁、口もとの上品さ、色白。とどのつまりは、まれに見る美男子といふべきであつた。

やがて若者は村に入り、その在でもつとも構えの大きな屋敷、すなわち共秀の家の門前に来て立ち止まると、しばしの逡巡のち、懐から横笛を取り出して手に構え、吹きはじめたのである。

奏でられる楽の音は澄みやかで妙なる響きを湛え、風とたわむれ光に和し、小鳥たちさえ近くの枝々からやつて来ては、その楽色に魅せられた如くに若者の周囲を群れ翔び、舞い踊つた。

その笛の音は、当然ながら屋敷のなかの共秀もまた耳にするとところとなつた。どこからともなく聞こえてくる、このうえなく美しい奏楽に、しばし我を忘れて耳を傾けていた共秀は、かように華麗で艶やかに楽器をあやつるのはいったい何者であろうかと、座を立ち、屋敷の外へ出た。

共秀が門前に認めたのは、今しがた読者諸氏に紹介したばかりの美しい若者である。若者が楽曲を奏し終えると、満足と感心の入りまじつた表情の共秀が歩み寄つた。

「まったく見事な腕前じゃ」

「ご賞賀を賜り、恐縮にございます」

若者はそのすすしい瞳で共秀を見据えたあと、笛を胸にあて、深々と敬礼した。

「そちは何者か。いずこより参り、いずれへ赴く？」

共秀は好奇心もあらわに問い質した。

「日々を流浪におくる、ご覧のとおりの一介の旅楽師。名乗るほどのものではございません」

若者はよどみなく答えた。

「そうかたく考えぬでもよからう。何かの縁じゃ」

共秀はさらに若者のほうへ歩み寄つて、親しげに腕をとつた。

「某は珠芳と申します者。こうして諸国を行脚し、各々の名君名士どのに楽師としてお仕えし奉る光栄を以てなりわいとしております」

促された若者は、無表情の美貌を崩さず答えた。

「楽師か。……ならば、笛の手ほどきもいたすのだな」と共秀。

「おそれながら」

共秀はしばし思案の態であつたが、やがて意を決めたとみえ、珠芳と名乗つた若者を見据えた。

「珠芳と申したな。しばし我が方にとどまり、その妙なる楽の音でわが耳を愉しませ、また笛の指南をも乞いたいと願うが、如何か」

若者は姿勢を正し、恭々しく一礼すると、共秀の前に膝をついた。

「ありがたき幸せにございます」

元来が風雅を気取りたがる共秀であれば、楽師を一人雇い入れるという考えは、大いに自尊心を満足するところである。日々の憂鬱から逃れ得る格好の慰みになろうという目算もあつた。

こうしたわけで、珠芳は従える稚児ともども、共秀の屋敷に一室をあてがわれ、三度の食を供されることとなつた。朝に夕に、珠芳は共秀に召されて笛を奏する。白い指はしなや

かに笛の上をすべり、流れ出ずる楽の音は、露をためる草花を揺らし、濃緑の樹木に分け入り、灰色の霧に濡れ、溪流に沿つて沢を渡り、いつしか深山幽谷にたなびく薄雲へと変化してゆく、えも言われぬ微妙の世界を現じていた。

さて、いっぽうちさは、己の顔貌の醜く膨れ上がり爛れ果てたことを恥じて、屋敷の奥の板間一室に籠もりきりとなつた。事実上の幽閉にも等しい。全身から零る極彩色の膿汁が着物に染みつき、かつては緑の艶を誇つた黒髪を無残にこわばらせた。厠に立てば歩き垂らす膿があとをひいて、その度に時子は床を汚したと言つては激怒し、ちさを打擲した。

「ちさ。女狐のごときお前の浅はかな自堕落ぶりを、私が知らぬとも思つていたのか。これはお前の醜悪な根性の報い、業病じゃ。邪淫の天罰が下つたものと心得るがよい」

時子は女の残酷な復讐心に燃えたぎつて、足元に倒れ伏したちさに向かつて憎々しげに言葉の刺を投げつづけた。

「共秀どのも、お前のような化け物などとうにお見限りなのは明白じゃ。女狐は畜生道に落ちるがふさわしいというもの。人間にかなうものではない。この頃では、共秀どのが私を褥にお誘い遊ばされるが毎夜の常。小便くさい小娘のふんざいで、男を手玉に取るうなどと、のぼせ上がるにもほどがあるわ」

悪罵の限りを尽くされたちさは、男を奪われた悔しさと醜く爛れ果てた己が身の惨めさに、ぼろぼろと涙をこぼした。涙はねばり気のある膿汁を溶かし、顔をつたい、床に溜まりをつくつた。

「おお、気味の悪い花を体いちめんに咲かせて、化け物でも涙を流すとみえる。薄く潤びる膚は白花、爛れ肉は赤花、腫れ上がるは紫花、膿にまみれる黄花、腐れ落ちるは緑花。ほほほほ……」

それは人間のものとも思われぬ呪詛の言葉に等しかった。悔しさと惨めさは、ちさのなかで次第に夜叉の心へと変じ果てていった。意趣返しもせぬままに、このまま朽ち果て、野垂れ死んでなるものか、と。

妙なる笛の音が何処からともなく流れてきて、二人の耳を惹きつけたのはそのときである。あたかも修羅にとどいた天界の奏楽といふべきであろうか。むろん、流浪の楽師珠芳の奏する笛にほかならない。

「あれは、あの笛の音は？」と、それまで頑に口を結んでいたちさが、弱々しく時子に問うた。

「共秀さまが、しばし屋敷にとめ置かれていて、珠芳と名乗る笛吹きのもの。ふん、化け物になつても楽の音の麗しさには心を動かされるとも言つのか、ちさ」

尽きることのない時子の悪口ではあったが、最早やちさは意に介することなく陶然となつていた。流麗このうえない笛の旋律に身を任せ、ちさはうつとりと瞳を閉じる。体じゅうの瘡痕の疼きが、海潮の退くが如きに癒されるのを感じた。そのとき、時子は気づいたのだ。笛の音に調和するようにして、あたり一面にえも言われぬ微妙の芳香が漂っていることを。驚くべきことに、それはちさの体から滲み出た膿汁の匂いであつた。笛の音が病の痛みを癒し、膿を華香に変じせし

めるとは、なんとという玄妙なる神通変化ぶりであろう！。

一曲を奏し終えた珠芳は、しばしもの思いに瞳を閉じていたが、やがてゆつくりと楽器を唇から離れた。あたりには静寂が戻つたが、それすら珠芳の笛によつて意味を授けられた、無上の静けさであるといふべきであつた。

「じつに、じつに見事じゃ」庭に面した縁に座し、笛を聴いていた共秀は、いつものことながら深く感じ入つた様子で、満足そうな笑みを湛え、言つた。「そなたの奏する笛は、聞く者をして今生にありながらも天界に遊ばしめる、まさに靈妙の威力をそなえた秘術と呼ぶにふさわしい」

「お褒めにあずかり、恐れ入ります」珠芳は伏目がちに答えた。

「いつたいどうすれば、そのたつた一本の笛から、かの幽玄麗美な世界を生ぜしめることができるのか。その秘密をぜひとも知りたい。どうか、その素晴らしい妙技をいかにして修めたのか、話してくれるわけにはまいらぬか」

共秀は遠慮がちに口ごもつた。芸の道に秀でる者が、そうたやすくは自らの奥義について語るはずはないと思つたからである。

珠芳は、相変わらず感情を表に出そうとしない、固い口調で答えた。

「私には、何の技もございませぬ」

「異なことを。そう勿体ぶらずともよいではないか」

共秀は意識的に食ひ下がつた。相手をはぐらかそうとする珠芳の諧謔であるとかをくくつたからである。しかし、共

秀はすぐにそれが真実の言葉であることを知った。珠芳はいたずらに綺語を弄するような輩ではない。

「何の技もないだど？。それはいつたいどういふことじや」

共秀は面喰らつて問い返した。

「私の技はただ空のみ。己自身もまた空に他なりませぬ。空であることを覚れば自在であり、自在であるがゆえに人は笛そのものとなることもかないましよう。空とはすなわち一切であるがゆえに、その一切空すなわち妙なる楽の音が、我が身という笛を用いてみずからを現したまうのでございます

……

珠芳は遠慮がちに瞳を伏せた。あたかも共秀の叱咤を覚悟するかのよう。しかし、共秀は却つて興味をそそられ、たみかけるように問うたのである。

「そなた自身が、笛であると申すか」

「私は、ただ妙音に我が身を奉じるのみ。妙音が我が身を使役したまうに任せるのみ。それより他はございませぬ」

珠芳の言葉を耳にした共秀は、大きく頷きながら唸るような声で言った。

「よくわかった。さすがは名人ともなれば、言うことが違う。妙音がそなたを使役す、か。並の楽師ではないこと、あらためて承知したぞ。珠芳、もう一曲所望したい。よいか」

「光栄に存じます」

答えるが早い。珠芳は颯爽と笛をかまえ、さえずる小鳥も妬み、そぞろの微風も恥じるがごとき、麗しい奏樂を繰り

返した。共秀は夢に遊び、またふたたび、ちさの体にあつても一時は疼きが快樂へ、膿汁が華香へと変じる不思議をみせた。

……………。

「共秀どの……」やがて一曲を奏し終えた珠芳は、ややあつて意を決したように、共秀に問いかけた。

「何じや」

「不躰な質問ではございますが、この在に萱女と呼ばれる女人がおりましよう」

二人の間にしばしの沈黙が波打った。

「萱女を知っておるのか」

突然の意外の問いかけに、共秀はひとしきりの当惑、探るような目つきとなつて珠芳を見る。

「は、……」珠芳はやや言葉に窮し、気おくれの態。「良からぬ噂を、耳にしましたゆえ。……いえ、ただの好奇の心にすぎませぬが」

良からぬ噂、という言葉が不興を買つたのか、にわかにか秀は不機嫌な声を張り上げた。

「好奇とは、そなたらしくもない。つまらぬことを気にかけるな。音に艶がなくなるぞ」

「とんだ失礼を。お許しください」

深々と頭を下げて、珠芳は場を辞した。常に自若、従容とした珠芳の瞳に、このときばかりは人間くさい情動のいろがふと漂っていたが、もとより共秀の認めるところではない。

と、そのとき、ほぼ珠芳と入れかわりに、共秀のもとへと

来る人影があった。妻の時子である。

「あの珠芳という笛吹き、どうしたことはじめての顔とは覚えませぬ」

梅雨時の霞にぬれる枯山水を前にして、時子は縁に共秀と対座し、そう独りこちるふうと言った。

「かつて何処かで見知った者ともいうのか」共秀は冷淡に言葉を吐き捨て、素知らぬ方を向く。珠芳の件の美男ぶり、内心に微かな嫉妬の火がともったのである。

「いいえ、そのようなことではございません。ただ、あの男の顔かたち、眼の光。どうしても、どこかで見かけたように思われてならないのです」

「私には見当がつかぬが」

共秀はなおも素っ気なく言い捨てた。

「しかもあの笛吹きには、ただことならない靈気が感じられて仕方がありません。どうかお気をつけあそばしますように」

「なに？」共秀の嫉妬が興味に変わった。「そなたも感じるか。あの男の尋常でないことが。さよう、希代のすぐれた楽師じゃ。それだけではない、あの男の笛は卓越した神通力を顕現する。あたかも神仙の秘術か、大陰陽師の魔術のようにな」

ざざつ、と湿った風が巻きおこったかと思うと、遠雷が山並みの彼方でとどろいた。

「嵐か。季節も変わる……」共秀は対の山肌、その上を覆う雲を見上げ、ぼつりと呟いた。

その嵐が去り、打ち続く炎暑が蝉の声をも炙る頃、ちさは己に残された時間がわずかであることを悟った。弱り果てた身体には歩くことすら難儀に感じられ、いずれは立つことすら能わなくなるのは必至。せめてその前に、共秀を奪った憎き正室、時子へ一矢を報わねば、他に何をかなすべきであろう。

ある夜、ちさは屋敷の者どもが悉く寝静まり、夢を貪る頃を見はからつて、己が身をかこちながら幽閉されている部屋を抜け出した。衰弊した身体で夜道を行くのに、いま頼れる者は珠芳の他にはない。ちさは醜く腫れ崩れた己の顔を赤い頭巾で覆い、足音を忍ばせて珠芳のもとを訪ねたのである。

「楽師さま」

そう呼びかけるちさの小声に、珠芳はまるで予期していたかのように眼を開いた。

「どなたか……」

珠芳は暗闇から燭台を手に現れた。頭巾を被ったちさの姿にも、驚く様子はない。それどころか、天が崩れ地が裂けようとも何ぞ我にあらんやといった沈着さ。もとよりちさがこうしてやって来ることを、以前より見通していたが如くであった。

「わけは聞かず、どうかこの先一里、村境は躑躅丘の華瓶庵なる山寺まで、夜道のお供を頂きたく、こうしてお願ひに上がりました。私はご当家に奉公申し上げる身でちさという者。今は汚穢の業病に苦しむ身とて、痛みは止まず、体もおれ、一里の道は壮健なる人の千里にも勝ります。ところ

が、楽師さまのおん笛によります妙なる楽の音が、不思議にも私をその苦しみから救ってくださるのでございます。あたかも無威徳の餓鬼が名僧善知識の誦する陀羅尼によつてひとときの安樂を得るが如くに。どうか、私がめざす躑躅丘に行き戻りますまで、尊きおん笛にてこの卑賤の身に力をお与えくださいまし。……」

ちさは切々と訴えた。

「華瓶庵……」珠芳は小声で、何か心あたりがあるかのように独りごちた。「その庵に住む者の名は、何と言われる」

「たしか、着蓮和上さまと在の人々はお呼び申し上げております。薬草取りの名人との専らの評判で」

珠芳の瞳が鋭い光を湛え、遠くのなにかを凝視するかのようにきつとなつた。笛を懐に携え、ゆっくりと一步をちさのほうに踏み出し、言った。

「是非もない。お供をさせていただきますしよ」

ちさは珠芳の吹く笛に助けられ、夜の道を歩いた。冥夜の笛は昼のそれにも増して響き深く、夜風に舞い、星の瞬きに和しながらちさを支えた。小径の草木の葉にあつめられた露雫が、珠芳の笛の音の過ぎるところ、奏楽に感応し蒼白く輝き、行く手を照らす不思議。その光はやがて躑躅丘を登り、華瓶庵の前へと至りついた。

「和上さま、着蓮和上さま」

ちさは本堂の前で呼びかける。ややあつて、真つ暗な堂内から着蓮がなま臭い息とともに顔をめつと突き出した。

「さきほどよりの艶やかな笛、あたかも錦紗のときまば

ゆさ、暗闇を破る仏の功德力とまごうばかりじゃ。そなたが奏したものであつたか」

着蓮はぼんやりとした虚ろな眼で、ちさを見据えた。笛の音の魔法によつて、夢と現の境にでも漂つとみえる。

「いいえ、笛は案内の楽師さまのおん手によるものでございます。私はお願いがあつて参りました」

そう語るちさの背後に立つ珠芳は、着蓮と目線を重ね合つた。珠芳の眼光はさらに鋭さを増した。

「楽師さま、かたじけのうございませう。和上さまのお話、すぐ済みませうゆえ、しばしの後、また屋敷への帰途に」

湿つた木の匂いの漂う暗い本堂には、燈された二本の燭台のあかりによつて薄ぼんやりと揺れる、色彩の落ちかけた不動明王、その両脇に侍る矜伽羅、制多迦の二童子、さびれた八角護摩壇。そこにある者は互いの表情すらさだかには判じかねるほどであつたが、ちさは己の醜い面容を覆う頭巾を離さなかつた。着蓮の居所は、その吐く息の臭さでわかる。堂の外では、珠芳の奏でる笛の音が、悠々たる響きをもつて流れていた。

「私の素性は、どうかお尋ねにならないでくださいまし。思いはただ憎き恋敵、性悪なる雌猿の調伏のみ。どうか力をお貸しください」

己の業病の平癒ではなく、時子への復讐の法を乞うとは、修羅道に落ちし者の妄執といふべきか。あるいは女の執念の恐ろしさといふべきであろうか。着蓮は、目前の女の病が、以前自分が時子に授けた秘法によるものと気づいてはいた

が、むろん素知らぬふりを決めこんだ。

「哀れな女人よ、さもなきことじゃ。そなたの体を穢す膿汁を、怨敵なる女性の女陰に塗せば事たりよう。……それにしても、あの笛の音は、不思議じゃ。ハ……ア、聞くほどに、頭が、酔ってくる、……。ハ……ア、ハ……」

それだけを言うと、どうしたことが普蓮は、珠芳の笛の音に酔い痴れたかのように、その場にどさりと倒れ伏してしまつたのである。

その朝、共秀は不可思議な眩暈とともに目を覚まし、言つた。

「なんと奇しい夢なのだ。ゆうべは夜を徹して、常に耳もとに珠芳の笛が鳴っていたかのようじゃ」

それを聞いた時子は、ただ無言のまま、遙かな記憶をたどるときのように眼を閉じた。誰かに似ている、それも遠い昔の、と。

さて、一番鶏の鳴く前に屋敷に戻り着くことのできたちさであったが、問題は普蓮の授けた方法をいかにして実行するかである。己の瘡痕から出する膿汁を時子の女陰に塗するなどということが、果してできるものであるか。普蓮のもとからの復路にあって、ちさはひそかに思索し続けたが、珠芳との別れ際、ちさはついに意を決して言つた。

「樂師さま、おん手ずからの笛の音の無量の効験力にあずかり、こうして無事に躑躅丘への夜もすがらの行脚、万謝を尽くしてもなお足りぬところとは承知の上、最後にもうひとつ、お願いがございます。当家の主人、共秀どのお取次ぎ

くださいまし。下女のちさが、是非とものお目通りを願つていと。どうか切に……」

珠芳は黙したままちさを見つめていた。朝の風に、珠芳の束ねられた後ろ髪がさらりとなびいたが、すすしき目もとには一抹の峻厳な光が宿つた。

「そのようなことで、お前様の病の癒えるとは見えませぬ。仇の心は却つて毒ともなりましょ」

すべてを見通したかのような珠芳の言葉に、ちさの心はおのいたが、ややあつて傍らに転がっていた草刈鎌に気がつくと、さつとばかりに拾い上げ、己が喉笛にあてがつた。

「私の頼みが聞き入られないなら、もはやあつて無きに等しいこの命。惨めな五体をさらすよりは、いつそ自刃の覚悟を決めます」

これにはさすがの珠芳も動顛し、身のこなし俊敏にちさの腕をつかみかかった。顔には顕わな懊惱の色がみえる。

「余儀なくば、共秀どのお伝え申し上げる。……その刃物、どうかお捨てなさい」

珠芳が腕にくつと力を込めると、ちさの手からぼろりと鎌が落ちる。歩み去る珠芳の背にちさは思わず合掌したが、その姿は既に修羅か餓鬼。人間のものではなくなつていた。

その朝おそく、ひとしきり珠芳に笛を奏させた後、共秀は思い出したように言つた。

「ゆうべは不思議な夢をみたぞ。夜もすがら、そちの笛の音の鳴り続くさまじゃ。まさか、奏楽三昧の夜明かしてもあるまいに。ははは……」

「風の唸り、雑木の葉擦れ、自然の悉くが空であるなら、それらが妙音に変化して何の不思議がありませんよ」共秀の言葉に動じもせず、珠芳は言い切った。そして、「ちさが、お会いしたいと切に申しております」

「何だと」共秀は駭然として動揺を極めた。「あの女に会ったというのか」

まるで己の恥部を暴かれたかのような狼狽ぶりである。

「一ツ屋の下に居るものなれば、いかに隠そうとも隠しきれぬものではありません。哀れなる女性、この身のままに阿修羅か餓鬼と見まがうばかりに變じ果て、いずれは長くない今生の命。おそれながら、せめて切なる望みに応じて見舞うが主君のご慈悲かと……」

珠芳は共秀と対照的な落ちつきを以て言った。

「うむ……」

共秀は、なぜか珠芳の得体の知れぬ威厳のようなものに圧倒されて黙した。妻の時子が言った言葉が、ふと思いつき出される。あの笛吹きには、ただことならない靈気が感じられてなりません、と。

「ただし」そのとき、珠芳ははつしと共秀の瞳を見据えた。「ちさの身にふれることがあっても、ふれさせることがあっても、決してなりません。貴殿のため、かつまた、ちさに罪業を積ませぬために」

その日の午後、共秀は久しく目見えていなかったちさの部屋を訪ねたのである。

襖という襖が開放たれ、屋敷のなかに夏の風が舞い込ん

でくるが、ちさが押し籠められている薄暗い納戸のような板部屋のあたりは、こころなしかひんやりと湿っぽい。ふと、天井からぼとりと何かが落ちた。同時に、足元にももの動く気配を感じ取って、跳ね返るようにすさった共秀の視界には、ぬめるような深緑色の体躯をくねらせながらうごめく、巨大な百足の形。

共秀は憮然たる表情をあらわにして、白足袋の先で百足を踏み潰した。山のそこかしこでは、蝉がやかましいほどに鳴いている。

「ちさ。体具合はどうじゃ」

やがてちさのいる部屋の前に立ち、共秀は声をかけた。むろん親愛の情などみじんも含まぬ、白茶けた猫撫声である。

瞳はちさの顔を見つめることなく、膿汁にまみれた寝具やら、殺風景な土壁やらの上を彷徨った。驚くべきことに、ところどころ崩れかけたその壁の上には、つい今しがた共秀が見かけた百足が、大小無数に張りついていた。ちさの膿汁の発する臭気に誘われたものとみえる。

「久しくご沙汰なく、ひとり捨ておかれしが如きこの身のわびしさ寂しさをかこつて、泣き暮らしております。旦那さま、うらめしうございます」

夜具の上に座ったちさは、無残な顔貌をあらわに共秀のほうへと向けた。顔じゅうを覆いつくした瘡痕のために、表情というものが既がない。あたかも能面のように、怒っているようにも見え、笑っているようにも見え、はたまた泣いているようにも見える。

「うむ。なかなか忙しかったのだ。すまぬ、すまぬ」
あまりに見えすいた共秀の言い訳であった。

「いいえ、旦那さま。醜く変じ果てた我が身であれば、もはやかつてのごときご寵愛は得られぬものと、ちさは諦めておりました」

言葉だけはしおらしく、ちさは顔を伏せた。共秀は返す文句に窮して、うゝむ、と唸り声をあげた。

「ですが、ただひとつ、ただひとつだけ、お願いがござい
ます」

「何だ、言ってみよ」

「いまいちどだけ、ああ、旦那さま、最後にいまいちどだけ旦那さまの、あの猛々しき御逸物を、愛でさせてくださいまし。忘れられないのでございます、あの、足の先から体の芯へ、燃えるがときつずきが……」

言いながら、ちさは這いずるように共秀のほうへとじり寄った。予想だにせぬ余りの奇怪な気色なりゆきに、共秀は思わず全身を凍らせたが、ふと今朝がたの珠芳の言葉を思い出し、「来るな、ちさ、寄るな、そのような病の身で、何をたわけたことを言っておるのじゃ、……」と、じりじりと後ずさった。

ちさは、ぜろぜろと荒く息を吐きながら、己の腕や手に唇を這わせ、そこから出する極彩色の膿汁をずると口に吸い取った。何故そのような奇矯な真似をするのか、思慮する余裕など共秀には既がない。

次の瞬間、ちさは、まるで残った最後の力を振り絞るかの

ようなおそろしい声とともに、共秀めがけて飛びかかっていたのである。まるで妖怪変化にでも組みつかれたように、共秀は腰くだけになった。

「よせい、ちさ、さわるなっ」

共秀は吼えるようにわめき散らしたが、ちさは病身の女とも思えぬ執念の力で、共秀の直垂をはぎ取り、黒々としたその陽根をくわえこんで、己が瘡疽の膿汁を注ぎ込んだのであった。

ちさの下になり、何とか組みほどこうとあかく共秀は、陽根をくわえた相手の髪をわしづかんで力任せに横引きした。

すると、軽い手応えとともに、ちさの髪の毛が腐った頭皮もろともずるつと剥け落ちたのである。恐怖とおぞましさと憎悪に駆られ、半狂乱となった共秀は、盲滅法にちさの頭を打ち、顔を突いた。何のはずみか、ちさが鋭い叫び声をあげて、のけぞるように共秀の身体の上からはじけ落ち、顔を手で覆いながらもんどりを打って板部屋の隅まで転がっていった。ようやく身体の自由を取り戻すことのできた共秀は、立たぬ腰を引きずりながら、這うようにして部屋から逃げようともがく。ふいに、床をまさぐる手が、何かぬめりとした丸いものに触れた。見れば、それは共秀の手に突かれて落ちた、血にまみれるちさの目玉であった。……

四の章 画中の美女と契りたる事

それから十日ばかりも経った、血色のしたたる満月の晩のこと、時子は自分の胸の、生白い二つの乳房の谷間に、小さな赤い吹き出物を見出したのである。しばしの後、にわかには時子の顔が恐怖に引きつり、凄まじい悲鳴をあげた。共秀が駆けつけてみると、時子はただ髪を振り乱し、うずくまって泣き叫ぶばかり。その胸元の吹き出物とは、ちさの体を覆った腐れ花の蕾そのものなのだ。畢竟、化け物のごときちさの姿が、すなわち避けようのない己の行く末であることを悟った時子は、異様に赤く大きい月が山野を照らすその夜、在のはずれの岩戸の上から、谷川めがけて身を踊らせたのだ。それは一瞬であったにもかかわらず、時子には無辺に広大な時間のうねりと感じられた。その流れのさなか、時子は己を悩ましてきた珠芳なる楽師のことを思った。その不可思議な笛の音のこと、すずしく伶俐なまなざし、まるで相手の心を見透かすような……、どこかで会ったことのある、その整った風貌。誰に似ているというのか。ややあって、時子の脳裏を閃光のように射抜くものがあった。「萱女……」

つぎの刹那、時子の意識は風のなかに散っていた。落ち行く時子の体は、右の岩にぶつかり、左の枝に裂かれ、やがて下流の淀みに浮かんだその軀のむごたらしさは、ちさの病にも劣るものではなかった。

こうして、ちさは己の復讐を遂げたのであった。

さて、時子は身を投げ、ちさは朽ち果てるばかりの身を横たえるのみ。妻の凄絶な死に、しばし狼狽した共秀ではあったが、やがて二人の女と閨事をかさねることのかなわなくなった共秀は、次第次第に、向かうところを失った己の精力のわだかまりを持って余すようになった。そもそも元来が好色のたちであるところへ加えて、くさぐさの煩慮、憂悶のたぐいは女色に溺れて忘れるを常とする心ぐせ。先立つちさの奇病、妻の死と、心労は極みにまで達していたが、それを慰める女はもはやない。むろん、女は時子やちさばかりではないのだが、なべて意のままというわけにはもとよりいかず、かといって、力まかせに手籠めにするなどといった狼藉者まがいを犯すほどの度胸はなかった。

悶々たる情欲の鬱積に、ついに堪えることの出来なくなつた共秀は、ふと思ひ立って、躑躅丘の乞食僧、普蓮のもとを訪ねる気になった。名にしおう薬草取りの名人ときこえた者であつてみれば、効験著しい媚薬の調合にも長けているであろうとの目算である。考えつくくと居ても立ってもいらなくなる共秀は、時子の喪の明けるのももどかしく、人目を忍ぶかのように、ある日の午後おそく、屋敷を後にした。

時は既に盛夏を過ぎ、行く道の傍ら、谷川の流れのほとり、そこかしこに狗尾草、風草、高野菊、草牡丹などが生い茂っている。傾いた陽の光が共秀の背中を射、行く手の山肌を黄金色に染めた。

やがて、普蓮の住まう華瓶庵も間近になったころ、躑躅丘の坂道をふわりふわりと舞いながら下ってくる人影がある。

共秀は思わず躑躅の陰に身を隠そうと踵をかえしたが、適当な場所がない。覚悟を決めて道を登っていくと、それは萱女であった。萱女はまるで魂を抜かれた人形のように、恍惚とした眼を宙に遊ばせながら、口もとを淫らに緩め、赤い着物の裾や胸元をだらしなく取り乱した格好で、まるで共秀のこなど眼中にないような様子で行き過ぎた。しかし、共秀は確かに感づいたのだ。すれ違いざま、萱女の周囲に何とも言えない淫欲の匂いが漂ったことに。その淫欲の気配は、共秀が足を踏み入れた華瓶庵の本堂のなかにも、なぜか生々しく濃密な熱気とともに籠もっていた。

共秀の姿を認めた普蓮は、床に置かれた何か石ころのような塊りを慌てて拾いあげようとして、不覚にもそれを取り落としたところであった。塊りはごろごろと共秀のほうへ転がってきたのだが、それは何と、てらてらと黒光りした不気味な髑髏なのであった。共秀はそのとき、これが噂に聞こえた、邪流の行者が祀る髑髏本尊というものであるかと直観し、普蓮が一時巷を騒がせた淫祠邪流の破戒僧なのかという疑いに慄然としたのだが、もはやそんなことにかまっている筋合いもなかった。正法であれ邪法であれ、世に奇特をあらわす力であれば何でもよかつたのである。……

「たやすいことじゃ」

鬱屈した情念に悩まされる共秀の話聞いた普蓮は、件の生臭い息を吐きながら言った。「薬草取りの労も、密咒もいらぬ。ただ、そなたには絵心があたりか。そこが肝心なのじゃ」

「絵と申される。異なことを……」共秀は訝しく首をかしげたが、乗りかけた舟である。「多少のたしなみは無論のこと」

決して自信があるとは口にしなかった。

「ならば話が早い。そなたの屋敷に奉公する下女じゃ。その女は極彩の膿を垂れ流しておろう。その膿汁を絵具の代わりに、好相の女人を描き、それを夜具の下に敷きて眠れば、夢枕に立つその女人と必ずや契りを結ぶことがかなう」……

半信半疑であったが、屋敷に戻った共秀は、いまや瀕死の状態であったちさの傷口から新しい膿を搾り取り、それを器に溜めて画筆を執った。ちさは叫びを発する力もうしない、膿汁とともに、まるで命の最後の余力をも奪い取られたかのようにして、声もなくこと切れた。

さて、共秀のほうは画筆を執りながら考えあぐねた。己と情を交わす女であれば、どれほど美しく描こうとも描きすぎるといふことはない。錯々たる思案の末に、かつて若かつた頃、上洛した折りに拝してその麗美に深く感じ入ったことのある、浄瑠璃寺に祀られた吉祥天の面影をその画に込めようと苦心した。ふくよかな顔容、流れるような指、情のこもる眼差し……。やがて幾日かが過ぎ、漸く仕上げられた画の像は、優雅な天女の尊容さながらである。

その夜。共秀はふと気がつくくと、見渡すかぎりにつち広がる艶やかな花園にいた。碧空の下を風はそぞろに吹きわたる、その度ごとに、蛩袋に似た紫色の花が揺れて、鈴々と涼やかな楽の音を響かせる不思議さ。清く澄む小川の流れを手

にすくつてみれば、水は砂金となつて煌々と輝きながらこぼれ落ちた。さてはここが話に聞く天上界か。だが自分はいつ死出の旅に立ったのだろうか……。

思案に暮れた共秀は、ふと背後に人の気配を感じて振り返つた。

そこに立つていたのは、周囲の花園の精髓を集めて人の形に結んだが如き、絶世の美女であつた。

さすがの共秀も気おくれを覚えて立ちすくむばかり。しかし美女はやさしく微笑しながら共秀を招き寄せ、自らもその白いかいなを共秀のうなじに絡ませながら、濃密な口合わせとともに花の褥へと倒れ込んだのである。その後には溺れた妙適はいまだに共秀が知らぬほどの官能の渦を巻き起こし、やがて共秀は心地よい疲れとともに眠りについたのであつた。

目覚めたとき、共秀は屋敷のいつもの座敷で、夜具にくるまつた自分を見出した。

夢だつたか……。そう反芻したのも束の間、共秀は己の体の芯に、その夢で享受した快樂の余韻が残るのを感じた。ふと思ひ至つて夜具の下に敷いた自らの筆になる女人像を取り出してみると、夢のなかにあつては気づかないでいたが、それはまさに昨夜の夢で共秀が抱いた絶世の美女そのものに他ならないではないか。

その夜以来、共秀は来る日も来る日も、憑かれたように夢を貪り、幻想の花園に遊び、美女を抱いた。もはや現実世界のいかなる女も、共秀の眼に留まることはなかつた。

共秀の身体に異変が顕れたのは、昼が仮初めの世界とな

り、夜の花園が正真の世界へと転じ、快樂をほしいままにすらに至つて十日余りが過ぎた頃のことである。ちさと時子、二人の女の命を奪つたおぞましい花癡の蕾が、顔から足の先まで、無数に一斉に吹き出したのであつた。

その蕾が腐乱の花を開く前、ある嵐の夜に、共秀は屋敷の梁に自ら縄をかけて縊れ死んだ。その軀の毛穴という毛穴からは、件の極彩色の膿が無数にしたり落ち、共秀の足の下に毒々しくも幻想的な紋様を描いた。

伍の章 大阿闍梨が呪殺法を修したる事

こうして時子が死に、ちさが死に、共秀までもが不帰の客となつたが、物語はまだ終わりではない。

忌まわしき患いの首魁ともいうべき、邪流の怪僧、着蓮のもとに、ある日、稚児を道連れにした一人の若い僧が旅装を解いた。清々しい瞳のなかにも鋭い光の宿る、色白の美男子である。

「某は一介の旅の僧、修行の身。この在にあつて、該博なる薬草の知識を以て衆生の利用、厚生を説かれ、善男子善女人の信望厚き大徳ときこえております着蓮和上どのにこ挨拶申し上げるべく、寄らせていただきました」

青年僧は着蓮の前にあつて、恭々しく敬礼したのであるから、久しく他者の尊敬など集めることのなかつた乞食坊主、着蓮は有頂天になつた。

「修行の身と言われるが、祖山は？」と、着蓮はだらしない相を崩しながら問うた。

「京は伏見の醍醐寺にございます」

「醍醐とは奇遇な。身共は教王護国寺に得度の後、伝法灌頂を畢えたが今はごらんの通りの田舎坊主。ひとつ、懐かしい都の話でもお聞かせ願いたいもの」

着蓮が伝法灌頂を修めたなどというのは、むろん口から出まかせの嘘である。すでに読者もご存知のように、加行の成満も待たずして髑髏本尊の邪流に染まったのであるから。

青年僧はしばし瞳を伏せて、何ごとかを考えているかのよつに口を噤んでいた。どうかするとその表情は、ひどく憂いを帯びたもののようにも見える。ふと着蓮は、この僧にどこかで会ったことがあるような覚えに捉えられた。その鋭くもすずしい目もとの美しさは、決してこの世に二つとあるものではないと思われた。しかし、かつて修行を共にした東寺の雲水のなかにも、またその後に出会った邪流異端の徒たちのなかにも、かように麗しい目鼻立ちの者はついに見当たらないのだ。

ややあつて、思案に暮れる着蓮の、あいも変わらぬにやけぶりをよそに、青年僧は毅然とした口ぶりで言った。

「さよう、花の御所ともうたわれし都のことども、話せば尽きないことではございましょう。が、如何せん先を急ぐ身のゆえ、本日はどうか、こちらの御本尊不動明王を供養させていただきます」

青年僧は、薄暗い本堂のなか、真紅の色彩をわずかに留め

る迦楼羅炎と呼ばれる大火炎を背に、降魔剣を振り立てる不動尊像を凝視した。着蓮は、まるで己の異端の行状を眼前の美しい青年僧に喝破されたかのように感じ、内心はひどく萎縮していたのだが、むろんそれを表だってあらわすわけにはいかない。

「それは有り難い。ぜひ御導師をおつとめ願いましょう」
本尊供養の申し出を断るわけにはいかない。着蓮は即座に許諾せざるを得なかった。

それから後は、何の世間話も無駄口もきかれることなく、いつさいが淡々ととり進められた。稚児に手伝わせて護摩木を組み、僧はしばし尊前にあつて黙想していたが、やがて刀印を以て九字を切った。

「臨、鉞、鬪……」

それからさらに陀羅尼を誦しつつ次々と印を結んでいくそのさまを、着蓮は不思議な緊張を身に覚えながら眺めていた。手刀のさばきといい、次々に結ばれる印の鮮やかなめらかさといい、それらはまったく秀逸というほかはない。一介の修行僧であるというが、いったいいかなる僧正のもとで修行を積んだのであろうかと、着蓮はただ呆然とするばかり。それまで澱んでいた堂内の空気が清浄な光によって切り裂かれ、次第に着蓮は、己の身が何ものか大きな力によって押し包まれてゆくのを感じた。

ついに護摩炉に火が入れられた。炎は舞い立つごとくにゆらゆらとあたりを照らし、まるで忿怒の相の不動像がいまも動きだすかのような錯覚を見る者に与える。

やがて、若き僧は殿かに通る声で表白文を奏上しはじめた。

「維時、伝灯大阿闍梨・皇海、至心合掌し謹んで真言教主・大日如来、両部界会、諸天善神、別しては本尊大聖不動明王、四大八大忿怒尊、弘法大師等、密教伝承阿闍梨耶、総じては尽空法界一切三宝の境界に曰して云さく。それおもんみるに、大聖この土に化を定めてより久しく、衆生一切の受くる利益これはかり難し……」

それを聞いて仰天したのは普蓮であつた。伝灯大阿闍梨・皇海……皇海と名乗つた眼前の若い僧が、伝灯大阿闍梨だといふのである。

読者諸氏にはご存知の向きもあるやも知れぬが、伝灯大阿闍梨といへば、大日経、金剛頂経という奥義秘法のごとくを伝授され、卓越した神通力を身につけた真言密教僧の最高位。僧侶であれば誰もがなれる、というものではない。その昔、弘法大師空海が遣唐使の一員として渡つた長安は青龍寺の恵果大阿闍梨が、すでに千人からいる弟子のなかからではなく、日本からやつてきた異国の青年である空海ただひとりにのみ、大阿闍梨となるべく伝法灌頂を受けたのはよく知られた話である。これによつて、密教の本流はインドでも中国でもなく、この日本に根づくこととなつたわけだが、このように、千人のなかからその資質をただして一人を選ぶがごとき狭き門。しかも、その資質の見方も単純ではない。ひとつには夢占といつて、その弟子が前夜にみた夢の内容で、法流を相承できる器か否かが判断される。かような大阿闍梨位

であれば、普蓮の驚きも無理からぬことと言えただろう。普蓮は、あまりに見事であつた、さきほどの九字や印のことを思い出し、ただ呆然と眼の前の青年僧を見守るばかりであつたが、普蓮の驚きは次の瞬間、身を震撼させる恐れへと変わった。

「……しかるに仏果を疎んじ、正法を泥土につけ、忌むべき薬草を以て有情の心を迷わせ、恥ずべき邪の法によりて有情の生命をむしばみ、ひたすら己の五欲にとらわれて教法をけがすこと、まさに外道の外道と呼んで然るべき、悪鬼羅刹に変わらず、まさにこれ髑髏本尊の邪流なり。……」

普蓮は思わず我が耳を疑つた。この表白文はいつたい何なのか。何故、自分が髑髏本尊を祀つてしていると知れたのか。そもそも、この僧侶は何者だといふのか。……

すると、普蓮の脳裏に、ある夜の情景がよみがえつた。野草の匂い漂う闇から、一人の顔を覆つた女が妙なる笛の音とともにあらわれる。……そうか、この僧はあのとときの、流浪の旅楽師と名乗つた男！

「きつ、きさまはあの夜の！」

「……弟子それがし、本日ここに壇上を結界し、大聖不動明王を勧請して邪流の輩を調伏す。仰ぎ願わくば、この法をもつて髑髏本尊の徒の地獄冥府に落ちんことを」

にわかに音高く錫杖が打ち振られ、職衆の役をつとめる稚児が声高に経文を唱えはじめた。

「なんのまねか、呪殺法とは。修法をやめろつ」普蓮は大声でわめいた。「いつたい何者だつ。きさまこそ外道の法を

使いおつて。呪殺法は、それを修する本人もまた明王の怒りに触れるのを忘れたか」

動顛した眷蓮は、皇海めがけて飛びかかろうとした。が、どうしたことが、身体が金縛りにあつたようにびくとも動かないのだ。はじめに皇海が切つた九字と結んだ印と唱えた真言によつて、自分に霊縛法がかけられていることに気づいたが、すでに遅い。

「おのれ、皇海！、きさま、さては幕府の隠密かあつ」

自由のきかない身体のなかで、かるうじて口だけをばくばくと動かすことが出来る。眷蓮は苦しそうにもがいたが、これまで己がさんざんないがしろにしてきた本尊加持の霊力であつてみれば、そうたやすく解けるものではない。やがて不動尊像の背後の大火炎がめらめらと大きく揺れはじめ、華瓶庵の本堂の柱や天井をなめ始めたではないか。

そのとき、どこからともなく低く大きな唸り声が響き、褐色の髑髏が眼窩を光らせながら飛んできた。眷蓮の最後の神通が邪流の本尊霊力を招いたのだ。髑髏は、あたかも狼が獲物にとびかかる隙を窺おうとでもするように、ふわふわと皇海の周囲を飛びまわつた。しかし、護身法によつて結界された皇海の周囲には、容易には近づけることができない。やがて髑髏は、体当たりをするかのような物凄い勢いで皇海めがけて飛びかかつてきたが、その瞬間を逃さず、皇海は懐から件の霊妙の笛を取り出し、それを髑髏に向かって投げつけたのである。すると、ピシツという鋭利な音響とともに、髑髏はいともたやすく真つ二つに割れ、その場に落ちた。

火界の密咒が繰り返し唱え続けられるにつれ、火炎はいよいよ大きくなり、灼熱の風とともに眷蓮に襲いかかる。

「うああああ……」

あたりは次第に火柱の乱れ立つ焦熱の地獄と化し、眷蓮は振り絞るような叫びとともにその場にくずおれた……。

眷蓮の黒く焼け焦げた無残な死体が華瓶庵の本堂のなかで見つけ出されたのは、その数日の後のことである。傍らには、真つ二つに割られた髑髏がやはり黒く煤を被つて転がっていた。明らかに大火事が起こつたとしか考えられないのに、村人たちはあまりの不可思議さに声を失つた。なぜなら、本堂やその周囲が大火に燃えたような形跡は、まったく見当たらなかつたからである。……

さて、いよいよ読者諸氏と別れるにあたり、美貌の放浪楽師、珠芳として物語に登場し、類い稀れる法力によつて邪流の怪僧眷蓮を調伏した大阿闍梨、皇海の消息についてふれておこつ。

この護摩の一夜を最後に、皇海は村を去つていったが、それと期を同じくして、狂女萱女の姿もまた見えなくなつた。眷蓮が最後に覚つたように、皇海は、世情の不安定をあおる髑髏本尊の邪流の存在をこころよく思わなかつた室町幕府が、その壊滅を目的に極秘のうちに全国に派した隠密僧の一人であつたことは確実である。京都の公家に伝わっていたあの失われた古文書には、「真言師皇海」の名がみえる。その

記録によると、皇海はその後において、なぜか邪流調伏の修法をいつさいおこなわなくなったのだという。それがために將軍家の内密の怒りを買ひ、未は醍醐寺の門跡になろうかという器であったにもかかわらず、その出世の道を断たれ、小さな末寺の住職として生涯を閉じた。さらに、この物語の読者にとって興味を誘われる記述が、この古文書にはしるされている。すなわち、「皇海、坂東より乱心の一女人を連れ帰り、高雄の妙法院なる庵に隠棲せしめたることを知りて、是邪流に心動かされし者と人々の呼ばわり……」と。つまり、皇海が一人の女を連れ帰ったがために、淫祠邪流に同情したものと人々が噂したというのだ。おそらく、皇海が末寺の住職の身に甘んじなければならなかった理由のひとつには、人口に膾炙したこの噂があったのであろう。

むろん、この物語の読者諸氏にあつては、皇海が京の都へ同行した女というのが萱女であるということは、もはや容易に察しがつくことと思う。そうであるなら、皇海がなぜ萱女を京へ同行させたのか、その本当の理由は、決して当時の口差のない噂の通りではないということもお分かりいただけるに違いない。皇海が、その後において邪流調伏の護摩を行じなくなったということは、幕府の隠密に身をやつしての諸國行脚の目的の何たるか、賢明なる読者諸氏にあつてはもはや自明のことと話者は心得るものである。

(おわり)